



## 静岡県折戸湾の貝類群集

著者	土 隆一
雑誌名	地学しずはた
巻	11
ページ	19-23
発行年	1956-08-01
出版者	静岡大学教育学部地学研究部
URL	<a href="http://doi.org/10.14945/00005985">http://doi.org/10.14945/00005985</a>

# 静岡県折戸湾の貝類群集

土 隆 一\*

折戸湾は清水港の最奥部にあたり、観光地として有名な三保の松原の砂嘴の一番内側の分枝でかこまれた、周囲約4kmのほぼ円形の小内湾である。湾口部には巴川が河水をゆるやかに注ぎ、それより外は清水港中央部をへて駿河湾に開いている。



水深は湾中央が最深部で7m、底質は大部分の地点で灰色の泥であるが、東側の嘴の近くでは潮線附近に礫まじりの砂底ないし泥底の部分が見られる。年間の水温および塩分については県水産試験場の調べによれば、表面水温は12.2~21.0°、表層水のCl(g/l)は5.8~18.0で4月がもつとも低く、水深6mの底層水では水温は15.9~24.2°、Cl(g/l)は16.1~18.8との事である。なお、湾内ではカキならびにアコヤガイの養殖がおこなわれている。

昭和30年10月30日、静岡県水産試験場の船をお借りして同湾内および湾口附近の底棲貝類ならびに遺骸を採集する事ができた。当日は色々都合で、採集方法として貝掻き網で1回ずつ9地点で底をさらう程度しかできなかったため、微小種の採集はむずかしく又数量は極めて大ざっぱなものになるが、こゝにその結果のあらましを報告する。なお、今後機会を見て詳しく調査するつもりである。

今回採集された貝類は別表の通りであるが、生活型によつてこれらをいくつかのグループに分けて考察してみると、

## 1) 湾内で養殖しているもの

マガキ、アコヤガイ

マガキは元来河口近くの岩などに附着していたもので内湾の泥質がちのところを好むが広域性

\* 静岡大学文理学部地学教室

で塩分濃度 (S ‰) 6~35 の範囲で棲息し得ると云われている。アコヤガイは外洋に面した内湾で波の静かな水の清らかなところを好むが、この両者が養殖されている事は、この湾がどちらかと云えばアコヤガイの棲み得るような外海の影響を受け易い潮通しのよい事を示していると考えられる。

## 2) 潮線附近の小石の下や礫まじりのところに棲むもの

スガイ、アマガイ、ホソコオロギ、ムギガイ、レイシ、イボニシ、ヒメヨウラク

これらはいずれも東側浅所の礫まじり砂泥底から見出された。レイシ、イボニシ、ヒメヨウラクは共にカキ養殖の害敵でもあり、その附近にも棲んでいると思われる。

## 3) 穿孔性および附着性のもの

マツカゼ、セミアサリ、ムラサキイガイ、ナミマガシワ

マツカゼ、セミアサリは潮線附近の軟岩に穿孔して棲んでいるものであるが、そのような岩礁の殆ど見られないためか極めて少数の遺骸しか採集されなかつた。湾口や湾外にも近くには岩礁は発達していない。ムラサキイガイ、ナミマガシワは養殖場にも港の岩壁にも礫にも附着していた。

## 4) 潮線附近の砂泥底に棲むもの

ウミニナ、イボウミニナ、アラムシロ、マデガイ

これらは内湾の潮干帯にふつうに棲んでいるものであるが、いずれもごく少ししか採集されなかつた。これは多分、折戸湾の浜辺が比較的急傾斜で潮干帯の発達が乏しく、又礫のない砂泥底の部分が殆ど見られないためであろう。又西側が大部分清水港の岩壁となつていて砂浜の少い事にもよるであろう。

## 5) 潮線附近の礫まじり砂泥底に棲むもの

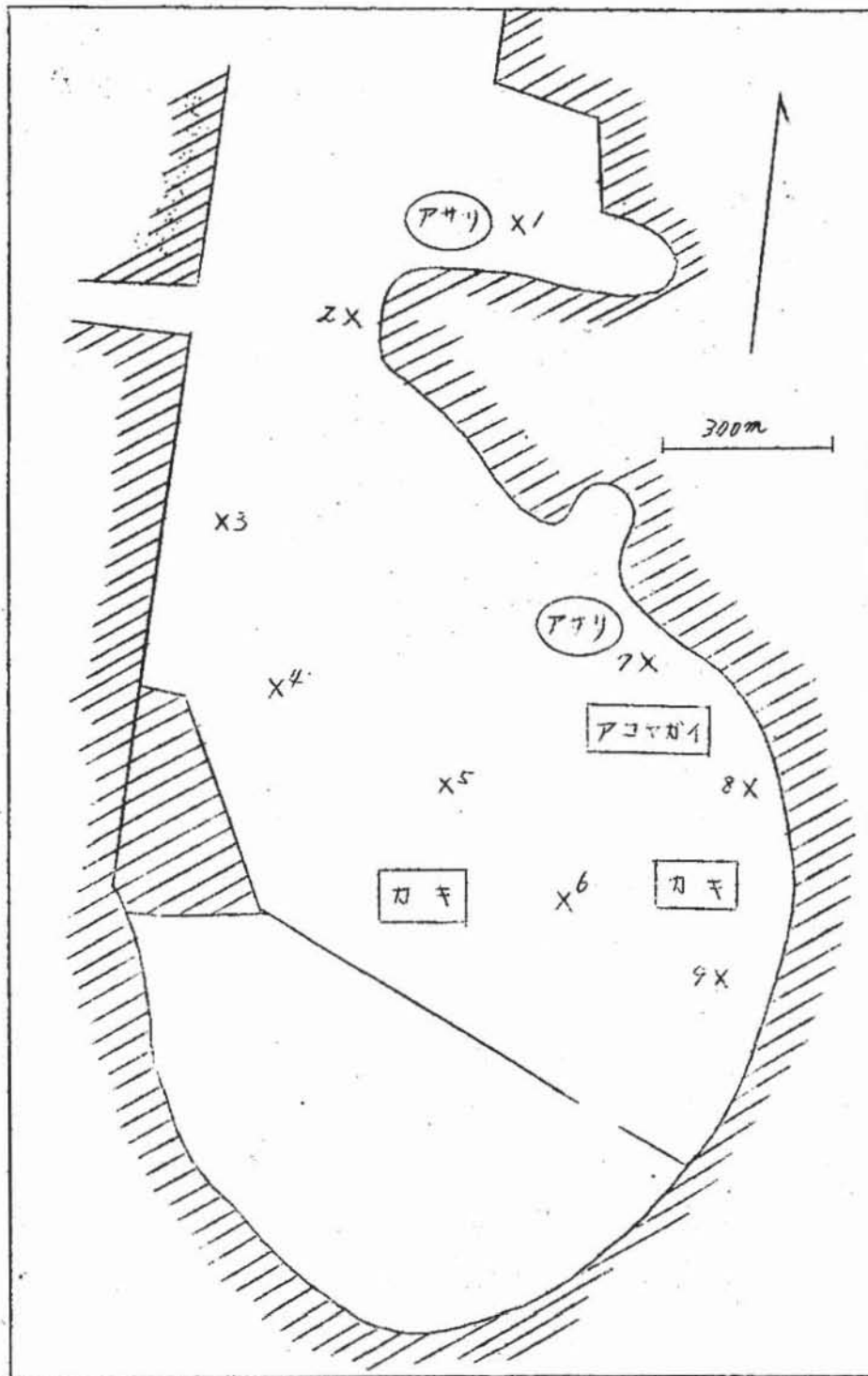
アサリ、ヒメシラトリ

これらは塚間附近および東側の浅所で多量に採集された。アサリやヒメシラトリはふつうは礫のない砂泥底に棲んでいるが、この湾のように礫まじり泥のところにも棲息していた。特にアサリは採取して販売される程である。

## 6) 潮線下数米の泥底に棲むもの

ヒメヨウナ、ニヨリイトカケギリ、マメウラシマ、キヌボラ、カミスジカイコガイダマシ、ホトトギス、シズクガイ、チゴトリガイ、イヨスダレ、アワジチガイ

これらはいずれも強内湾性の標徴種であり、ホトトギスを除いてはすべて湾中央部の泥底から見出された。いずれも微小な貝であるため今回の採集方法ではかなり抜け落した事であろう。イヨスダレはわずか2片しか採集されず、湾内に殆ど棲息していないように見えるが、多分折戸湾は



第2図 折戸湾及び測点図

棲むのには浅すぎるのであろう。イヨスダレはふつう15~20mの深さの泥底に棲んでいるらしく、瀬美湾（愛知県）では多量の遺骸を採集する事ができた。又清水港の浚渫作業の際には湾内の西側から多量の遺骸が見出されたが、それから考えるとかつては極めて良好な棲息環境であつたらしい。



ホトトギスは湾奥のカキ養殖場で少し見出されただけである。浜名湖では湾奥の引佐細江でも多量に棲息していた事から考えると停滞性の汽水域を好み、折戸湾のように潮通しのよいところにはあまり棲息しないのであろう。

### 7) 潮線下数米の砂底に棲むもの

カエモリガイ、ナガニシ、ムシロガイ、スタレモシオ、イタヤガイ、モノノハナ

これらはどちらかと云えば外洋性のものでふつう外洋に面して開いた湾の細砂底に棲んでいる。折戸湾内ではそのような砂底は発達せず、湾外から運ばれて来たとも考えられるが、ナガニシは生体であつた事から考えれば、またアコヤガイなどが棲息している事から考えれば、現在でも多少は棲息しているのかも知れない。この事から見ても折戸湾がかなり外海の影響を受けているのがわかる。

以上全体の総種数は38でまだ増加するとは思いますが、他の内湾に比べて少しいし、又堆積量も少しい。これは湾が小さく、又単調な環境によるものであろう。

湾内における遺骸の移動は殆ど無い模様で棲息地がほぼ同時に遺骸堆積地になつている。即ち湾中央部ではシズクガイ、チゴトリガイを中心とする強内湾性のものが殆どであり、浅所のマツカゼ、セミアサリ、ナミマガシワなどが若干混入している程度である。又潮線近くの礫まじり泥底では塚間附近がアサリ・ヒメシラトリ群集、湾内東側ではアサリにヒメヨウラク・イボニシを中心にした巻貝の群集が見られる。

全体として、強内湾性ではあるが、外海の影響を受けた、即ち停滞性ではなく潮通しのよい、しかも潮干帯の発達しない小内湾の群集を示している。したがつて湾口部に注ぐ巴川が貝類相に及ぼす影響は極めて少いものと考えられる。

終りに色々御教示頂いた国立科学博物館の滝府先生、また今回の調査に便宜を計つて頂いた静岡県水産試験場、採集に協力された本学地学研究部学生諸君に厚く御礼申し上る

折戸湾貝類調査表

測 点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	カキ養殖場
深 度 (m)	1.5	3	4	7	6	7	5	3	3	
底 質	• M	GsM	GM	GM	M	M	GraS	GM	GraS	
ス ガ イ	1						(9)			
ウ ミ ニ ナ		1△							1△	
ア マ ガ イ							1			

測 点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	カキ養殖場
深 度 (m)	15	3	4	7	6	7	5	3	3	
底 質	sM	GsM	GM	GM	M	M	GmS	GM	GmS	
カニモリガイ	1	1								
ホソコオロギ							2		2	
ヒメゴウナ						1				
ニヨリイトカケギリ	1									
マメウラシマ					1	3			6	
ナガニシ							(2)			
ムシログアイ	1	1							1	
アラムシロ	3						2			
キヌボラ					4	2 <sup>△</sup>				
ムギガイ	(2)						1			
ヒメヨウラク							(8) <sup>l</sup>			×
レイシ		(1)							1	
イボニシ		(1)					(5)			
カミスジカイコガイダマシ						1				
イボウミユナ										×
ヤカドツノガイ									3	
アオカリガネエガイ										×
ヒバリガイ										×
ムラサキイガイ				1	1					×
ホトトギス				○ 1						×
マガキ	多		多		多		1 <sup>△</sup>	多		
アコヤガイ								(2)		
ナミマガシワ	1		1		1	1 <sup>△</sup>		1		×
イタヤガイ									1 <sup>△</sup>	
チゴトリガイ							5			
シズクガイ					(2)2	(2)3				
アワジチガイ		2				2				
アサリ	(多)	(多)	多		1		(多)	(多)	1	
イヨスダレ						1			1	
マツカゼ						1			1	
セミアサリ					1					
ヒメシラトリ	(1)6 <sup>○</sup>	(6)9 <sup>○</sup>						1	1	
モモノハナ		1								
マテガイ		2 <sup>△</sup>								
スダレモシオ									3	

註 1) sM....砂質泥 G....礫まじり (礫はこゝでは径4cm以下)

ms....泥質砂 M....泥

2) ( )は生体を示す。その他の数字は遺骸数(二枚貝は殻片数)

「多」は多量、○印は二枚貝合併、△印は破片を示す。

3) ×は湾奥のカキ養殖場で採集されたもの

4) 測点は別図参照